

レブラ組織の培養

Timofejewsky 述

著者はレブラ患者の結節を無菌的に取り、それをリンゲル氏液内に入れ之を細かく切り *Carré* 氏瓶及被蓋硝子式に培養せり。

培養基はヘパリン加家兔血漿及ヘパリン加人血漿とを等分に混合し之に二〇―三〇%の人胎兒(二、三ヶ月の胎兒)液を混じたり。

液體培養基として胎汁を加へたるタイロイド液を加へ四―五日目に液體を交換し、之を孵籠内に入れて培養せり。

最もよき生長は家兎及人血漿を用ひたるものなり。

レブラ菌の發育は極めて徐々にして結締織及游走細胞が増殖す、即ち五時間後に其組織片より種々の形を示す小細胞が游出し廿四時間目には紡錘形細胞出現す。

二日目には主として游走細胞が現はれ、組織片より放線的に

結締織細胞が増殖を始め、殊に大喰細胞は非常に多數に現はる、此の大喰細胞内にはレブラ菌が含まれ其の多くは培養基の纖維素がとけた部分に浮び居れり。

五―六日の培養に於て之等の大喰細胞が融合する事により多核巨大細胞が形成せらる、而してレブラ菌は之等の大喰細胞内にあるが尙細胞外にもあり。

十日目の培養に於て培養基が濁濁を始め、此部分には多數のレブラ菌の遊離せるを見る。

此の時期に今迄結締織形成細胞の如くに見えしものが大喰細胞に變る。尙三週間を経過するも細胞はレブラ菌と共に生活し、かくの如くにしてレブラ菌は細胞外にても増殖をつゞけ増殖がはげしき時は細胞は壞死するに至る。尙之等の菌は一―二ヶ月間血漿内に生存し、大なる集團を形成し、遂にはデフテリー菌の如き形になるも依然として抗酸性を有す。*Korotowsky* は斯かるものは抗酸性を失ふと述べしも著者は夫を實驗せず、然し集絡を形成する事もなしと云へり。

斯くの如く血漿内に増殖せるレプラ菌を普通の培養基に増殖する事を試みしも成績不良に終りたり。

(Arch. f. exper. Zellf. Bd. 9, 1930.)

脳下垂體前葉のホルモンに就て

Zondek, Bernhard 共述

著者は脳下垂體前葉内には卵巢の濾胞を成熟せしむるホルモンを認め、之を Prolan A と稱し、グラーフ氏胞が破ぶれてから黄體細胞が出現するのはこの前葉内 Prolan B なるホルモンがある爲めと認めた、これ等の事實を生れてから四―五週間を経過した三〇―三五瓦雌大黒鼠とハツカ鼠に此等の藥物を注射して其腔上皮の變化並に病理解剖的に子宮、卵巢を細検して判断したが、卵巢を摘出した鼠では此等の藥物を注入しても腔上皮に何等の變化が起らない、又前葉内には體を成長せしむるホルモンは含んでゐない。

(Klin. Woch. 1930. Bd. 1.)

Jodolinwismit(Quimby)による腸

チフスの化學療法

Salmi, H 述

腸チフスの療法は在來、對稱的にして特種の藥物的療法がない、著者は Quimby を以て腸チフス及びパラチフスの三十七例を治療した。此方法は驅黴療法の如く三錠を臀筋内に注射する普通は二日を隔いて、重症は一日隔て之を行つたが、不快なる副作用を認めなかつた、先づこの注射によりて下熱が速である、上記の治療せる内で六八・八% に本藥劑の効果があつたが、三一・四% は其作用が明でなかつた、而してこの Quimby が他の傳染病にもこのやうな効果があるか否やは實驗しておらぬが著者はこれを化學的療法と考へてゐる。

(Schweiz. med. Woch. 1930. 1.)

網狀赤血球の數量を定むる法

Holboell 述

生理的食鹽水に Brillant-Kresylblau を 1% の割合に溶かし、其二五瓦内に血液(靜脈血)〇・一瓦を混合し、之を載物硝子或